

表⑥ 大学独自の給付型奨学金・学費減免制度(2011年度)

大学名	奨学金名	主な条件(人数)	支給金額
東京	授業料免除	年収400万円以下	授業料全額
一橋	学業優秀学生奨学金制度	学業成績、人物(12人予定)	96万円
早稲田	創立125周年記念奨学金	各学部が独自の方針で運用(1200人)	20万~60万円
慶應義塾	慶應義塾創立150周年記念奨学金	経済的な理由により学業の継続が困難でありながら、勉学の意欲を持ち、将来成業の見込みがある者(360人)	授業料の30%
上智	第2種奨学金	経済的理由によって学業の継続が困難(2010年は472名)	授業料の全額、1/2、1/3
明治	明治大学給費奨学金	経済的理由により修学困難な学生(1300人)	20万~40万円
青山学院	経済支援給付奨学金	経済的理由により学費支弁が困難な3・4年生(18人)	年間学費相当額限度
立教	入学試験成績優秀者奨学金	一般入試、センター入試の成績優秀者	授業料相当額(4年間)
法政	入学時特別奨学金	入学試験(A方式、T日程)の成績上位者(457人)	授業料相当額
中央	学業成績優秀者奨学金(法学部)	学業成績、明確な将来目標(50人程度)	授業料相当額、1/2

出典：各大学ホームページ

## 奨学金制度

### 長引く経済不況を考慮した大学独自の援助制度が続々

東京私大連盟によると、仕送り額の月平均は9万1600円。前年を下回り過去最低額となっています。子供を自宅外から大学に通わせる親の負担は、かなり厳しい状況であることが分かります。

長引く不況や親のリストラで、学業の継続が難しくなる学生も少なくありません。こうした学生を援助するのが奨学金。近年では、時代を反映して、給付型の奨学金や学費免除などの制度を、独自に設けている大学が増えています。

早稲田大学では、学内奨学金のすべてが返還不要の「給付型」で、給付総額は20億円ものほりです。受験前に申請して認定されると入学後に奨学金が交付される「めがせ」都の西北奨学金は大きな話題を呼びました。

表⑦ 大学院進学状況の一例(2009年度)

慶應義塾大学		早稲田大学	
学部	進学率	学部	進路報告者
文	17%	政治経済学部	7%
経済	6%	法学部	26%
法	22%	第一文学部	10%
商	5%	第二文学部	6%
理工	80%	教育学部	16%
総合政策	18%	商学部	6%
環境情報	20%	理工学部	71%
看護医療	1%	社会科学部	5%
薬	79%	人間科学部	14%
		スポーツ科学部	13%
		国際教養学部	11%

※「慶應義塾大ガイドブック2011」より

※早稲田大学HP「数字でみる早稲田」より  
※2010年3月ないし2009年9月卒業

## キャリア教育

### グローバル化に対応する雇用の変化 就職を意識した理高文低が強まる

厚生労働省および文部科学省が発表した「就職状況調査」によると、2011年春に卒業する大學生の4月1日現在の就職率は、91.1%。これは調査を開始した1996年度以降で最も低い数字となりました。3月11日の東日本大震災が、その後の状況に影響を与えていることが予想されるだけに、深刻な事態と言わざるを得ません。

この背景には、経済不況が大きく関わっていることは確かですが、では景気が回復すれば良くなるのかというと、そんな単純なものとは言えないようなのです。つまり、グローバル化による企業の人材雇用に変化が生じてきているのです。

今、世界を相手に戦略を巡らす企業は、外国人採用枠を上げ、英語に通じた人材の確保に懸命です。秋田県の国際教養大学は、授業の大半を英語で開講、教員の6割が外国人籍で、最低1年間の海外留学を卒業要件に含むなど、グローバル社会に対応できる人材の輩出を目指しています。

学生に社会人基礎力や就業力を付けさせる「キャリア教育」は、母親世代では考えられなかったことでしょう。例えばインターンシップ(就業体験)も、これまでは数週間から長くても3カ月ほどの期間だったのが、6カ月という長期に渡って行う大学も出ています。千葉商科大学のサーベラス想像学部では、インターンシップに協力する企業を「公式パートナー企業」として抱え込み、実際の就職につなげていく仕組みを作っています。

就職に結びつきやすい理工に人気が集まる「理高文低」の傾向は、今後ますます強まる様相。看護・医療技術系志願者も大幅に伸びてくるでしょう。大学院への進学率も理工系では7割以上を占め、より専門的・技術的な職業に就くためには、学部4年間ではマスターしきれないという判断は、常識化されつつあるようです。

## 進学率の上昇

### 女性の高学歴化が進学率に影響 理工ガール、農学ガール、土木女強し!

4年制大学の進学率は、1985年で25.5%、1991年から上昇の一途で、2009年には50.2%と遂に半数を突破。2010年も50.9%と過去最高を更新中です。母親世代から比べれば、約2倍に増えたことになりまし。

これに反して短大の進学率は、1985年で11.1%。その後1995年から減少し、2010年は5.9%。かつて人気だった難関短大への進学率が下がり、4年制大学へとシフトした女性の高学歴化が、進学率のアップに強く影響しているといえます。

特に近年顕著な傾向が表れているのが、理系分野で女子学生が元氣だということです。肉食系女子に草食系男子などとも言われていますが、いまや農学部、工学部の半数は女子、理工学部の女子志願者も増加傾向にあり(表④参照)。建築土木系の女性の活躍と併せて、「農学ガール」「理工ガール」「土木女(トボシ)」と称されるなど、注目を集めています。

表④ 大学・短大の進学率の推移

年	大学(大学数)	男女比	短大(大学数)
1985	26.5%(460)	男38.6%	11.1%(543)
		女13.7%	
2010	50.9%(778)	男56.4%	5.9%(395)
		女45.2%	

表⑤ 理工学部の女子志願者が増加

大学(一例)	学部	年度	男子	女子	計	女子比率
上智	理工	2010年度	3,813	855	4,668	18.3%
		2011年度	3,605	983	4,588	21.4%
同志社	理工	2010年度	7,318	931	8,249	11.3%
		2011年度	7,236	1,043	8,279	12.6%